

## 「(仮称)音別義務教育学校」開校準備協議会 第5回会議 議事要旨

### ■会議名

「(仮称)音別義務教育学校」開校準備協議会 第5回会議

### ■開催日時及び場所

2024(令和6)年6月4日(火)午後6時30分

音別町コミュニティセンター 研修室1～3

### ■議題

- (1)教育部会について
- (2)制服・ジャージについて

### ■結果

- (1)教育部会について

- ① (仮称)音別義務教育学校の教育目標について「見通しをもち、深く考える子」、「思いやりをもち、心豊かな子」、「命を大切にし、元気でたくましい子」、「粘り強く行動し、実践力に富む子」の4つに決定した。
- ② (仮称)音別義務教育学校の学年の区切りは、1～9学年を3つの段階(ステージ)に分ける「4-3-2制」とし、名称については、1年生から4年生までをファーストステージ、5年生から7年生までをセカンドステージ、8年生と9年生をサードステージとすることに決定した。

- (2)制服・ジャージについて

制服検討委員会(事務局:音別中)を立ち上げ、両校の教職員、PTA、コミュニティスクール委員で構成される同委員会において、本年10月以降、書面審査などによる選考が行われる予定であることが示された。制服や指定ジャージの導入学年、制服のデザインについても同委員会が中心となって検討されることが示された。

### ■発言要旨

- (1)教育部会について

委員： 議題(1)教育部会について。教育目標などに対する児童生徒・保護者の意見等の集約結果について、学校からの報告事項とするともに、教育目標案は協議事項となる。

次に、小中連携・学校間交流についても報告事項となる。

最後に、学年の区切り「4-3-2」ステージ制については、議論いただき、このステージ制とすることで了承していただきたい。

委員：（仮称）音別義務教育学校開校に向けた現在までの教育部会の活動内容を説明する。

資料2【教育目標案】について。こちらは、提案事項となる。

教育目標は、音別小・中学校コミュニティ・スクールで目指している子どもの姿を踏まえた上で、4つの目標で構成する素案を決定したことを前回の1月30日開催の本協議会で説明した。

教育目標は9年後の姿を見据え、地域のお力添えを受けながら、たくましく生き抜く子供を育成したいとの理念を盛り込む内容にしなければならず、両校の教職員だけではなく、保護者や地域の声、さらに、学校の主役である児童生徒の考えも考慮することとした。そこで、小・中の保護者、CS委員の皆様、中学校生徒会役員、小学校児童会へアンケートを行い、そのアンケート結果を基に、両校の校長・教頭で構成する連携事務局部会で教育目標について検討を重ね、連携全体会において再協議をした。以上を踏まえ、次の4つの教育目標を音別義務教育学校の教育目標として提案する。

「見通しをもち、深く考える子。思いやりをもち、心豊かな子。命を大切にし、元気でたくましい子。粘り強く行動し、実践力に富む子。」

以上、審議を願いたい。

委員：ただいまの、教育目標などに対する児童生徒保護者の意見等について、質問等はあるか。

委員：当初考えていた素案というところで、「深く考える、豊かな子」という部分では、皆の意見を聞いて、より具体的な表現になり、分かりやすくなったのではと考える。また、リズムがとても良いと感じる。一般社会でいえば、会社の経営理念など考える機会もあるが、それに通ずるものがあり、わかりやすく非常に良いという評価をしている。ほかの意見についても皆の意見を聞いていただきたい。

委員：リズムに関してほかに意見はあるか。

委員：よくよく見ていただくと気が付くかと思うが、1行目、2行目の語尾がそれぞれ〇〇を持ち、3行目、4行目の語尾が〇〇し、というふうにはリズムを考えて作ってある部分も少し注目してほしい。

委員：さらに、2月、5月のアンケート結果の中において、取り入れられる部分を取り入れ、リズムがよいような形で提案が出されていると思うのだが、いかがだろうか。

委員：私も、ここに出された提案は大変良いのではないかという感じがしている。やはり、現代の学校のいじめの問題がある中で、2番目にある、「思いやりを持ち、心豊かな子」、また、「命を大切にして元気でた

くましい子」の部分は大変好きな文面で、今後も、このようなものを持ちながら、これからも健やかに育ってほしいという思いである。

委員：ほかなければ、よろしいか。(全会一致で合意)

それでは、(仮称)音別義務教育学校の教育目標については、提案どおりとする。

委員：次に、小学校・中学校の連携や、学校間交流に関する報告をする。

委員：小・中学校の連携や、学校間交流について報告事項となる。スライドの写真を見ながら説明を聞いていただきたい。

令和5年度 of 取組から紹介する。5月、小学5・6年生が中学校を訪れ、中学1年生とともに外国語の授業を受けている様子である。互いに挨拶、自分の氏名、年齢、好きな食べ物などを英語で交流しながら学習しており、小学生も失敗を恐れずに英語を使い、中学生はさらに流ちょうに英語で伝える姿が見られた。

次は、音中祭。音中祭は例年、土曜日の開催である。そのため昨年度は、小学校は土曜活動日の一環として観覧をした。会場の体育館は、前方に小学生、後方に保護者と、いつも以上に多くの観客が集まり、大いに盛り上がった。

次は、両校の教職員がお互いの公開授業に参加している様子である。これは、小・中学校の連携の充実を図るため、釧路市においてすべての中学校区ごとに行っている「小中ジョイントプロジェクト事業」の取組の一環である。これは、義務教育学校になった際に例えば、今の小学校教員が中学校の内容を、逆に、中学校の教員が小学校の内容を授業する際に、非常に有益だとの感想が聞かれている。

次は、連携あいさつ運動である。冬場だったが、12月に両校の玄関ホールで互いの児童会・生徒会役員が混合になって集合し、登校する児童生徒に挨拶をする様子をご覧いただけたと思う。

次は、連携教育部会の全体会の様子である。1月の冬季休業中に釧路市教育委員会の外国語アドバイザーに来校していただいた。

続いて令和6年度 of 取組である。まずは、教育部会を開催し、新しいメンバーの顔合わせを行った。また、全員で令和5年度の活動を確認し、各部会に分かれて令和6年度 of 取組に関する情報を共有した。

5月には第2回の連携あいさつ運動を行った。挨拶運動に慣れた様子の写真も見ることができる。

最後に、地域の取組として、ビーナススポーツ少年団の音別海岸クリーン作戦も、両校の児童生徒が参加しているので紹介する。

委員：ただ今、スライドで交流の様子の紹介があり、報告事項ではあるの

だが、質問等があれば、発言願いたい

各委員：（発言なし）

委員： 続いて、学年の区切りについて、学校から説明する内容をもとに協議いただき、決定していきたい。

委員： 資料に戻り、ステージ制の制定について説明する。こちらは提案事項となる。

ステージ制とは、9年間でどのように区切り、教育活動を進めるかの基となる学年段階の区切りのグループ分けのことである。

資料3について、このステージ制を検討するにあたり、教育部会では、近隣の義務教育学校の状況を令和5年度に調査した。

一番上の阿寒湖義務教育学校を例として、記載内容を説明する。昨年度の阿寒湖義務教育学校は教職員数23名、児童生徒数は71名である。目指す15歳の姿はご覧のとおり。阿寒湖義務教育学校は、4年生までをファーストステージとくくり、一部教科担任制、5～7年生をセカンドステージとくくり、全教科担任制としている。そして、8・9年生をサードステージとくくっている。また、1年生から音楽、3年生以上は音楽・体育・英語の教員免許状を所有している教員が今の中学校のように教科担任制で指導している。制服着用は8年生以上で、指定ジャージと上靴は5年生以上となっている。

一番下の音別義務教育学校の欄では、令和8年度を想定した教職員の人数、児童生徒数、目指す15歳の姿を記載している。音別義務教育学校における学年段階等の考え方は別紙(案)としているので、次のページの資料(4)をご覧いただきたい。

1の【義務教育学校特有のワード】について説明をする。小学校課程を「前期課程」、中学校課程を「後期課程」、中1から中3までを「7年生から9年生」と呼ぶ。

次に、2の【小中一貫教育の充実】について説明をする。現在、小学校から中学校へ進級する際に、学校生活の変化や学習内容の難化等により、中学校入学を機に、一定数の生徒が精神的、身体的な負担を感じる【中1ギャップ】という問題が生じると言われている。それは、実は、小学校段階からこの問題が始まっている場合が少なくないとも言われている。

そこで、ポイント①で示したように、小5辺りから抽象的な考え方ができ、心が揺れ動く時期を考慮する必要があると考え、義務教育学校の体制や期待する姿を整理した。

黄色の枠内がその内容となる。音別義務教育学校は、施設一体型

となり、一人の校長と一つの教職員集団となる。この体制になると、「一つの学校」という安心感の下、これまで以上に全ての教職員による継続的、安定的な取組が期待できる。また、策を5つに分類し、特に、策5では、9年間の「いくつかのまとまり」に分け、効果的な交流や集団活動を実施することで、下級生は上級生に対するあこがれの気持ち等をもつ、上級生は下級生に対して思いやりの心等をもつ姿も期待できる。

これらのことから、5・6年生と今の中1である7年生をひとまとまりとし、4年生以下、8・9年生をそれぞれひとまとまりとすることが、効果的ではないかと考えた。

その際、義務教育学校では、小6の卒業式、中1の入学式がなくなることから、ポイント②に示しているとおおり、「節目」を生かした取組の充実が「成長の自覚」に肝要となると考えた。よって、音別義務教育学校においても、周辺校と同じように、「4－3－2制」とすることを提案する。

義務教育学校が開校すると、4年生はファーストステージのリーダーとして活躍し、7年生はセカンドステージのリーダー、そして9年生は学校全体のリーダーとして活躍するよう、魅力ある教育課程づくりに努める。

なお、グループの呼び名も先ほど使用した、ファースト、セカンド、サードを使用する。ステージ制に関して、意見等をいただき、審議願いたい。

委員： それでは、「4－3－2」のステージ制に関わり、資料3と資料4、音別における昨年の段階での区切りの考え方、どの資料に関してでも構わない、何かしらの疑問点や感想、意見等はあるか。

だいたい従来の小学校では、1・2年生を低学年、3・4年生が中学年、5・6年生が高学年という区切り方、また中学生では3年間ひとまとまりということで、先輩から学ぶ・後輩を労わるなどと、そのような統一性があったかと思う。中1ギャップの関係もあり、5・6・7年生をまず一括りにしようという考え方からスタートした、というような説明だったかと思う。

委員： 今の説明を聞いた中でちょっと感じる場所があった。

小学校から中学校へ入る時の中1ギャップっていう表現があり、釧路市内の学校だと学区が違うため、確かにそういうことはあると思うのだが、音別は同じ地域の同じ小学校から中学校へ上がるということを考えると、制度の違いはあるにしろ、他の地域よりはそのギャップに

対する心配はないのかと感じた。

そこで、そのギャップがあまりない中で、いずれかは高校へ行く。そういう刺激がない中で育った子供たちが、中学校を卒業後にいきなり高校へ行った時、社会のギャップっというところが少し気になるが、それらの情報や、どう考えるかがわかればお答えいただきたい。

またもう1つは、先ほどの説明の中で、ファーストステージ、セカンドステージ、サードステージという表現をしているところと、初等部、中等部、高等部と表現しているところもあり、これは皆の意見でどういう表現にするかを決めてよいことなのか。他のところの学校を見ると少し表現が違うので、説明をいただきたいと思う。

委員： 確認だが、1点目はギャップに関すること。音別地区内でのギャップと、そして中学校を卒業した後、多くの生徒が旧釧路市内の高校に行く際のギャップ。もう1点目がステージの呼び方に関すること。

事務局： 事務局の方から知り得る範囲で話をさせていただく。

まず1点目、他地域に比べると音別小学校の子供たちが基本的にほぼ全員音別中学校へ行くということについて。

釧路市内でのほかの例では、阿寒小学校の子供は阿寒中学校へ行く。また、阿寒湖義務教育学校も、阿寒湖小学校の子供は阿寒湖中学校に行くという形で、ほとんどそのまま小学校1校から中学校1校へ進学するということ。そのような学校は他地区にもたくさんあると思う。

そのような学校では中1ギャップはほぼなく、複数校であるところでは起こり得るのかというと、おっしゃる通りだが、複数校や、大規模校であるほうが起こる頻度は高い傾向にあるのは確かである。

ただ、これまで音別中学校に入った生徒が小学校から上がってきて、完全に不登校に陥る、完全に拒否反応を起こして先生に反抗するというような目に見える大きな事例が、どの程度あったかというのは、今は詳細に掘んでない。ただこれは、全体的にお分かりかと思うのだが、全くそういう表立って大きなものとしては現れなくても、やはりギャップというのは少なくともあると思う。

例えば友達関係などや環境のギャップについては大変少ないとは思うのだが、中学校に上がった後勉強が難しくなる、学習に対するギャップ。また、先ほど話のあった高等学校への、いわゆる入試の問題のプレッシャー。それらについては、いきなり中学校に行った時に起こり得るのは、言うまでもなく、規模の大小に関わらず、あるいは地域の様子が変わらず、当然あることだろうと思う。

そういう点では、義務教育学校において、昨年度の1回目から既に次のような説明が継続して行われてきた。

1つの学校になっていくことにより、先ほどの例えば小学校の段階から、全教科か一部教科かは別にして、教科担任制のように先生が変わること、常に小学校1・2年生が中学校2年生、3年生、ここで言う8年生・9年生の姿を校舎内で既に見ているという部分では、中学校生活へのギャップの頻度がより少なくなるのではないか。これは、非常に期待される場所である。

2点目、「4－3－2」という段階について、いくつかの例の中を踏まえ、ファースト、セカンド、サードステージという呼び方を音別義務教育学校では採用したいという報告があった。この仕組みについてはこれで確かに良いと思う。また、呼び方や名称については、ひとまずこれで決定案ということで教育部会からは出されたのだと思うが、ただこれは検討の余地がゼロではないと思われるため、多様な視点からの意見を頂戴したい。ここでの意見は、学校側の教職員においても非常に参考になるだろうと捉えている。

委員： ぜひほかにもご意見をいただきたい。

委員： 私から見ると、このファーストステージ、セカンドステージ、サードステージのほうが呼びやすいと思う。ただそこで、1年生、2年生、3年生の呼び名を更にまとめてファーストステージとして、この呼び方をしなければならない場面とは、どこで使うのだろうかと感じる。

また、初等部、中等部、高等部というのは、私はあまり好きでなく、英語の方が良いかと思われる。ただ、使う場面については、生徒間の中での分けなのか、教育課程の中の分けなのか、少々わかりにくい。

事務局： まず、教育課程の中では法で決められており、先ほど1～6年、7年、8年、9年というのは学年の呼称であるが、年齢は12歳までが小学生。13歳から15歳が中学生と決まっている。ここを前期課程、後期課程という呼び方にするというところは、もう変えようのないところだと思われる。

また、どんな場面でファースト、セカンドなどと使うのかという部分について、先ほど提案の中にもあったのだが、例えば4年生をファーストステージのステージリーダーとすることや、7年生をセカンドステージのリーダーにするという話があったと思う。

一般的には小学校6年生で卒業式が1回あり、すぐ1か月後には中学校での入学式があつて、中学校3年生で卒業式がある。一つの

学校になることにより、6年生の卒業式と中学1年生の入学式がなくなることで、色々なところに区切りを持ちたいと考える。

例えば1年生から4年生までだけの行事が、これから何か作られるとする。その際、4年生にそこを仕切らせることによって、4年生にとってはよりリーダーシップを培わせる経験ができる。

今までの小学校では、委員会のトップとして6年生の児童会長がいたのだが、今度は学校全体になるとどうしても全てが最高学年の9年生になってしまう。そうしたことで、9年生が全部仕切るのではなく、1年生から4年生までの行事によっては、例えば、4年生までだけの球技大会だった場合には、4年生が全部仕切って行うことが実現する。

また、セカンドステージにあたる6・7・8の真ん中で何か行事があったときには、7年生がリーダーシップをあげて仕切るということも起こり得る。このように途中の学年でも、トップ学年のリーダー意識・自覚を培うことができる。「4－3－2」という区切り方でステージの名前を何かしらつけ、そこでの動きを重視することによって、義務教育学校にした良さである色々な効力が発揮されてくる。

それでなければ、従来からある、小さいところの小中併置校と同じになってしまいがちになる。あくまでも新しい義務教育学校という、良いところを取ったシステムを取り入れるからには、その意識を子どもたちや保護者、そして先生方にも持たせ、この3つの括り方という意識をさせる名称を付け、その活動を増やすということは、非常に有効だと捉えている。

委員： ただいまの説明は非常に分かりやすかった。要は、今までの小学校でいえば6年間は、絶対6年生がリーダーであり、中学校の3年間では、3年生がリーダーというのが、今度は9年間で3つのグループに分けられるということだろうか。そうであれば、非常にわかりやすく、小学校、中学校の枠にとらわれないという意味では、3つのグループが非常に良いのではないかと思った。また、全く関係がないのだが、修学旅行はどうなるのだろうか。

委員： 学校行事には宿泊的行事というのがある。宿泊研修、修学旅行がその学年に位置づけられている。今は合同で開催をしているということになり、その時にどう判断するかは分かり兼ねるが、基本的には小学校の教育課程では決まっているため、6年生と9年生の学年で行くのが修学旅行。5年生と8年生の学年で行くのが宿泊研修ということになるだろう。そこは変更する必要はないのではと考える。

また、連携事務局部会でも、中学生のステージの中に高等部と入

れるのは何かしら混乱が生じるのではないか。高等部と言われて中学生だというのは少々違和感があるだろうと考え、このファースト、セカンド、サードというのを選んだ理由の一つにある。また、私の勝手なイメージであるが、4年生を終了する際の、卒業企画にファースト卒業式というような名前を使うこともできるだろうと思う。そのように名前を使用した、色々な企画ものを考えていけるのではないだろうか。

事務局： ただいまの回答、その通りだと思う。

先ほども出ていたが、6年間で小学校、3年間で中学校という国の決まりがある。その中では、途中での転出や転入もあるという事をふまえてほしい。例えばの話であるが、勝手なことに、義務教育学校だから6年生の修学旅行は無くし、その代わり9年生のときに、長期の道外旅行を組むとしたら、転入生はまだしも転出をしていった子は、それを経験しないことになってしまう。都会で私立の小中高一貫校であれば問題はないのかもしれないが、他の小、中学校と大幅にあまりにも違うことをやるのは問題が出てくる。

そういう意味では、転校もある、転出にもあるということもどこかに置いて、最大限の良さを生かしながら、これからは考えていっていただきたい。

また、もう1点の先ほど高等部といった部分については、確かにそういうことである。小中高が一緒になっている学校との区別が分かり、混乱を招かないためにもとのことで、高等部という名前を少し避けたいという話があったかと思う。

委員： ほかに意見、質問等はないか。それでは、学年の区切りについては、学校から提案があった「4－3－2制」を採用し、名称については、ファーストステージが1年生から4年生まで、セカンドステージが5年生から7年生まで、サードステージが8、9年生とすることで決定する。（全会一致で合意）

## （2）制服・ジャージについて

委員： 議題の（2）「制服・ジャージについて」、教育部会で検討した案を提示したうえで、本協議会にて協議し、決定していきたい。

委員： 資料5－1の制服のモデルチェンジを説明する。こちらは提案事項となる。

制服のモデルチェンジは、多様化の時代に合わせた制服の選定と、制服の購入代金の見直しを考えた取組を考えている。制服を選定し、試着し、決定、購入までにはかなりの時間を要する。

2枚目のページ「モデルチェンジの流れの把握」をご覧ください。モデルチェンジまでの流れには9段階あることが分かる。

3枚目のページには、制服検討委員会の設置において、男性と女性が混じるということが一般的な構成となっている。また、教職員だけではなく、PTA 等の保護者や地域の方の意見も参考にしたいと考えている。

4枚目のページには、スケジュールについて記載している。納期までの時期、おおよその時期を確認いただきたい。

直近の項目としては、制服検討委員会を立ち上げ、制服指定メーカーの選定をすることが一般的である。その後の項目は、デザイン検討期、新制服を見るプロモーション期、規定書や販売指定店を選考する規定作成期、そして最後に納品・販売となる。

また、ここで訂正があり、納期・販売期の時期だが、令和7年12月から令和8年3月に訂正をしていただきたい。

制服検討委員会の活動終了時期は、令和8年3月に設定している。

次の資料5-2の「制服検討委員会の設置について」は、これまでの説明の要旨として、まとめたものとなっている。

委員構成については、それぞれの関係各位から了承を得るよう進めている。

1回目の制服検討委員会は8月か9月を予定し、10月には書面審査またはプレゼン選考を予定している。なお、中学生の指定ジャージについては、今のままの私服ジャージとし、指定ジャージにはしないことを考えている。制服を何年生から着用すべきか、という点についても、今後、制服検討委員会で検討していく予定である。審議を願いたい。

委員： 制服検討委員会のことや、または制服のモデルチェンジに関わること、推進計画とジャージの話もあったが、質問、意見等を頂きたい。

委員： 今の中学生の制服は、男子が詰襟。女子がセーラー服ということになっている。

委員： 夏と冬の違いはあるか。

委員： 夏は、男子は上着を着用せず白シャツで、女子は白ブラウスということになっている。ボウタイというのをしているが、ボウタイはしてもしなくてもいいということであり、少し涼しげな格好の夏服ということになっている。

委員： 保護者の方に聞いたところ、現在の制服の価格は6万5千円から7

万円くらい。それが制服のモデルチェンジによって、今の制服は3万5千円くらいであるから、3万円くらい安くなり半額近くになる。機能性が高まる、自宅で洗うことができる、などの利点があるという調査の結果である。大規模校であれば人数も多く、その分だけ価格は下がるのだが、規模が小さいため、大規模校に比べると若干高くなる見通しである、と制服メーカーから言われているところである。10月に書面審査またはプレゼンと書いているが、大規模校と比べ、小規模校でのプレゼンでは採算が合わないため、プレゼンに参加しないという制服メーカーが出てくるのではないか、というような話も出ている。そのようなことも踏まえると、書面審査のほうが音別にとってはスムーズにいける。まず業者を決め、そこから最後を詰めていくという作戦で制服は変えていけるのではないか、というような見通しが示されている。

委員： 制服のことについて。いま説明を聞いた中で、やはり小人数では物事として、社会の常識ではコストが上がるというのは認識できるのだが、これは、一からデザインを作り直さなければならないのか。近くの学校の制服はまずいが、遠く離れた地域の学校の制服をそっくり真似て、そのまま制服に認定するというような考え方は、あり得るか。

委員： 今、そっくり真似るという話があったのだが。細部の一から作っていくということは、音別はしないほうがいいと言われている。業者の時間ばかりがどんどん掛かり、採算が取れないからと、降りていってしまうと言われている。

あるものでおおよそその外側を決め、例えば、小中でよく使っている色をスクールカラーとして盛り込んでいくなど、あとはそのような細部にこだわっていったほうが、音別では良いのではないかとされている。

委員： 5月の下旬に制服の見本市があり、少し見てきた。市内の中学校で、2つの川に挟まれたところに立地している学校があり、胸ポケットの部分に2本のブルーラインがあった。それは川を表しているのだということだ。また、校章が胸ポケット全面に付いているものもあった。

今の時代の制服になっていると思えたのが、ボタンが取れるのである。なぜかというと、女子も男子も両方着られる仕様のブレザーになっているためである。ボタンを付け替え、このように着ることができるブレザーを採用しているなど、様々な工夫がされていた。また更に、兄弟でも、男女でも着られるというようなサイズ感にもなっている、というような話も聞いてきた。

委員： 男子でも、例えば学校によってはスカートを準備するなどの選択肢

を設けることが可能だと言われている。なので、業者が決まった後は、例えば子どもたちのアイデアを取り入れ、ボタンの柄をイラスト募集してみるなど、そのような様々な細部の部分に、子どもたちの意見などを採用していくことが十分可能である。またそのほうが、音別らしいものが出来上がるだろうと考えている。

委員： 男子はネクタイをつけるかどうかについて。制服の展示会では男女でネクタイという見本もあり、そもそもネクタイをせず、ポロシャツのスタイルという学校もあった。そこも選択できると思うが、女子にネクタイができるのだろうかという質問をした。フック式になっているため、パチンと留めるだけの形としたネクタイを採用していて、その方が200円は安いという話をされていた。このように色々なパターンが選べるだろうと思う。

委員： 私たちの年齢では、制服といえば詰襟にセーラー服という印象が強い。昔はそうであったが、近ごろの学校については、どのような形になっているかは想像がつかない。

また、先ほど「4-3-2」のステージ制ということだったが、ステージごとに違ったデザインの制服にするのか、全部一律にして校章をつけるなどとするのか、そのあたりで把握できない部分もあり、説明いただきたい。

委員： 何年生から制服を着用することになるのか、というような話につながっていくかと思う。例えば、先ほどの大きなところで話をすると、阿寒湖義務教育学校では8年生から2年間、制服を着用している。事務局の方でその経緯などあれば説明いただきたい。

事務局： たまたま阿寒湖の制服や指定ジャージを変えた時に関わっていたため経緯をお話する。阿寒湖で8、9年生の2年間にしたのは、経済的な負担を考えたため。7～9年生の中学生の間、1年生の入学式と、3年生の修学旅行に合わせて、制服を2回買うという家庭が割と多くいるだろうと想定した。

そのため、中学2年の8年生になる時に1度買えば、一般的に大きめのものを買っておくと、2年間の場合は擦り切れ度合いや成長速度的にも、状態は幾分もつだろうと考えた。制服は8、9年生だけというのは、当時、地域の保護者の負担感と意見を聞いて決めた。

本州の義務学校では1年生から制服の学校がたくさんある。そうすると成長に合わせ2、3年ずつで買い揃えなければならない、負担が非常に多くなるもので、制服は8、9年の1回限りとなった。

また、指定チャージについて、阿寒湖の場合は、どこかで区切りを

つける意味でも、指定チャージは5年からになった。制服は8、9年のサードステージなのだが、セカンドステージとなった5年時に、今日より4年から5年のセカンドステージになったという自覚を持たせるために、ジャージだけは5年生以上で揃えようということで、導入した経緯がある。

ただ音別は音別の考え方、一番は保護者の考え方である。経済的なことや出費を考えると保護者の意見と、実際に着る子どもたちの意見を多く聞き入れて検討されれば良いのではないかと思う。

また因みに、先ほど既成の制服に、ラインやワンポイントを入れることによって、かなり費用を下げるという案があったが、これは他に多くの学校でも取り入れている。

阿寒湖の場合、実はジャージでそのやり方を取り入れている。カンコー学制服のジャージを使っており、カンコーとの名前に引っ掛け、交渉の結果でこのメーカーのロゴの前にAを入れてもらい、AKANKO（阿寒湖）としていただいた。

このように、何かしらのワンポイントだけでも、オプションを下げてでも非常に独自性は出ると思う。そこは教育部会の先生方、保護者や地域、メーカーとも交渉しつつ良いラインを求めていけば、より良い制服になるのではないか。

委員： ジャージなどの件について、中体連のときなどに、その学校を表すものは何か着ないのかと聞いた際、それぞれの部活でジャージを揃えているということだった。それであれば何年生から指定ジャージというのは、学校を代表してどこかへ行くときにも問題はないだろうと思った。

制服ひとつで、その制服を着たいからその学校へ行きたいというような話も昔に聞いたこともあり、いずれにしろ特徴を持たせ、そういうことも期待できたら良いのではないかと思う。

委員： たしかに、自分の子どもたちの経験上、中学生を卒業する3年間でかなり体型が変わった。そのため先ほどの話を聞いて、制服を作ったときには親の負担が非常に大きくなるだろうと考えた。そして更に特殊なものにするほど、ましてや少人数では、より単価は上がるのではないかと思った。極端な話をすれば、今の制服の約半分の値段でできるというのを聞き、少し安心はした。

やはり、小学校まで小さくても、中学校になるとぐんと伸びる子もあり、そういうところを加味して、少しでも利用できるものは利用しながら、付加価値を付け、独特のものにできれば良いのではないか。

委員： 私も皆さんと同意見で、ほかには特にはない。制服検討委員会で十分に話し合っていたきたい。

委員： 小学校の参加日のときに、保護者へ義務教育学校に向けて制服が変わる可能性があるということをお話した際、保護者達の意見というのが、やはり、素材の丈夫なことや、体の体型が変わったとき、という意見が出ていた。そういったところを制服検討委員会のときには、ぜひ意見を参考にしていけたら良いのでは、と思う。

委員： 制服に関してはやはり一度作ったら10年、20年と続いていくものだと思う。検討委員会でしっかりと検討して決めていくことを願う。

委員： それでは、制服検討委員会で今後についての詳細を検討し、また提案事項ができた際には問い合わせいただきたい。(全員了承)

### (3)お知らせ

委員： この度、音別小中学校合同運動会体育大会のチラシを資料6として資料5の一番後ろに付けて配布している。6月29日土曜日に、時間の都合のつく方、興味のある方にはぜひ、小学校のグラウンドで今回初めてとなる合同開催へ足をお運びいただければと思う。更にまた、フキ祭り音頭も実施するため、大勢の方に参加いただければ大変ありがたい。雨天の場合は7月2日になり、次の日の順延ではないため、そのところも確認したうえで、ぜひお越しいただきたい。

委員： それでは、本日予定している議事については終了した。

### ■担当課係

学校教育部教育支援課教育政策係